こどもが まんなか PROJECT

◎まなびの広場　令和7年2月10日発行
偶数月10日発行
令和4年6月10日創刊　通算No.17

2025 2

まなびの広場

―子どもの未来を共に考える―

VOL.17

編集よりご案内

本号は、令和６年８月に開催した第１５回幼児教育実践学会で口頭発表とポスター発表を行った園からそれぞれ1園ずつ、発表の概要や実践的な取り組みについてご紹介いただきました。さらに、多くの方に知っていただきたい絵本を選考した、第１６回ようちえん絵本大賞の受賞作品をご紹介します。

最終回を迎える長谷川眞理子氏の連載では、様々な哺乳類の子育て方法とその要件から、ヒトの子育てについてご執筆いただきました。

ECEQ®に参加された学識者や有識者の方からECEQ®に期待することについて、最終回となる本号は、北海道大学教育学研究院附属子ども発達臨床研究センターの川田学氏にご執筆いただきました。

CONTENTS

短期連載❸
ヒトはどうやって人になるのか?
■ 長谷川 眞理子氏（総合研究大学院大学　名誉教授）

（一財）全日私幼研究機構理事長からのご報告
幼小の連続性を考える②
■ 安家 周一（一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構　理事長）

ECEQ®コーディネーター養成講座Ⅳの開催報告

幼児教育の質向上とECEQ®～期待される役割と効果～④
■ 川田 学氏（北海道大学教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター　准教授）

第16回ようちえん絵本大賞～新しい絵本を見つけよう～

第15回幼児教育実践学会―口頭発表・ポスター発表の報告―
子どもとともにあゆむ保育 ～非認知能力の育成を通して～
■香川県　学校法人ときわ幼稚園
環境の再構成について
■熊本県　荒尾第一幼稚園

機構の活動報告・お知らせ
令和6年度全国教育研究担当者会議の開催／
第16回幼児教育実践学会の開催案内

一般財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

短期連載 3　ヒトはどうやって人になるのか?

ヒトの子育ては共同作業

総合研究大学院大学　名誉教授／長谷川 眞理子

哺乳類の共同保育

これまでの２回にわたって、私たちヒトという生物の赤ん坊が大きくなる道筋について、進化生物学の観点から解説してきました。ヒトは、脳が大きくておとなが複雑な生活をしています。その分赤ん坊が生まれてから、おとなのような複雑な生活ができるように育てるためには多大な労力がかかります。その様子について書いてきましたが、一つ強調するのを忘れたことがあります。それは、ヒトが、母親だけ、また両親だけで子育てをまっとうすることは不可能な動物だということです。こんなに労力のかかるヒトの子育てには、親だけではなく、血縁・非血縁を含めた多くの人々の協力が必須なのです。

哺乳類は、母親が妊娠･出産･授乳して子を育てるので、子育てには、当然母親が多くの努力を捧げます。一方で哺乳類の父親の多くは、ただ精子を提供するだけで、子育てにはほとんど関与しません。しかし、母親だけでなく父親も子育てにかかわらなければ、子が育たないという哺乳類もいます。典型的なのはタヌキでしょう。タヌキは、小動物も狩る雑食性で、食物の確保は簡単ではありません。一夫一妻で、メスが出産するときには、つれあいのオスがメスを補助します。子が生まれたあと、オスは、つれあいのメスに食べ物を持ってくることもしますし、子育てにも積極的に関与します。

ところが、母親と父親という２頭でも足らず、もっと多くの個体が子育てにかかわらないと子が育たない哺乳類もいます。それを共同保育と呼びます。その典型は、南アフリカの砂漠に住むミーアキャットという動物でしょうか。ミーアキャットは、血縁だけでなく、非血縁者も含む大きな群れで生活しています。赤ん坊に哺乳するのは母親しかできない仕事ですが、赤ん坊を危険から保護したり、自分で餌が獲れるように、餌の獲り方を教えたりするには、他の多くの個体がかかわります。

イヌの祖先であるオオカミもそんな哺乳類です。オオカミは一夫一妻の夫婦が中心となり、以前に生まれた子ども、つまりお兄さんお姉さんを含めた大家族で生活します。オオカミは肉食ですから、獲物を捕まえなければなりません。そして、赤ん坊はやがて、自分で獲物を捕まえて食べていかなければならないのですから、その技術を習得せねばなりません。それは教えねばならず、それをみんなで行います。

一方、オオカミの群れどうしのなわばり争いは激しく、そんな争いの際には、赤ん坊がかみ殺されることもあります。それを防ぐために、上のお兄さんお姉さんたちが、赤ん坊のいるところとは正反対の方向に必死で走って敵を煙に巻くそうです。これも、両親だけではできないことですね。

共同保育になる要件

哺乳類の中で、母親の世話だけで十分なのはどんな種類なのか、母親と父親双方の世話が必要なのはどんな種類か、両親だけでも無理で共同保育になるのはどんな種類か、それを決めるもっとも重要な要因は、おとながどんなものを食べているか、ということではないかと考えられます。両親による世話や共同保育が必須なのは、たいていは食肉類で、他の動物を捕まえて食べなければならない生活です。しかし、他の動物だって食べられたくはないので、必死で逃げます。すると、捕食者は、それを出し抜いて相手を捕まえなければならないのですから、食べること自体が、とても大変な仕事になります。そんな食べ物を必ずや子どもに提供することはとても大変な仕事なので、母親だけでは無理かもしれません。

草食動物はと言えば、植物はどこにでも生えているので、ただそれをむしゃむしゃと食べればよいのです。植物は逃げませんし、子どもに、どうやって食べるのかを教えることもほとんど必要ないでしょう。しかし、肉食動物は子どもがそんなことを自分でできるようになるためには、いろいろなことを学ぶ必要があり、それには少なくとも両親が必要です。そうなるとすぐにも、両親だけでも無理になる場合が多いように思います。

先に述べたミーアキャットは、アフリカの砂漠地帯に集団で住んでいます。鳥の卵や小動物を狩りして食べますが、サソリなどの危険な動物も捕まえます。このように、自らは、他の動物を捕まえて食べる捕食者なのですが、ミーアキャットを捕食して食べようとする、もっと大きな捕食者もいるので、そのような危険から身を守らねばなりません。そこで子育てをするのですから、子どもたちを捕食者から守ることもしなければなりませんし、子どもたちが、自分で他の動物を捕まえて食べられるように教えなければなりません。たとえば、自分がサソリに刺されないようにしてサソリを捕まえるにはどうしたらよいのか、それは結構難しいことですね。こんな仕事のすべてを、母親だけでやることは無理、両親だけでも無理と言うことで、ミーアキャットは大きな集団で暮らしており、子育ては共同保育です。

ヒトは共同保育の動物

そこで、私たちヒトです。ヒトの祖先はアフリカの類人猿で、ヒトに一番近縁なのはチンパンジーです（図1）。類人猿はみな植物食ですが、チンパンジーは、森林の中で葉や果実を食べています。ところが、ヒトの祖先は森林を出てサバンナに進出し、他の哺乳類を捕まえたり、硬い地面の下にある根茎を食べたりするようになりました。つまり、類人猿としては大変に難しいものを食べるようになったのです。

図1　チンパンジーの母子　（長谷川寿一撮影）

さらに、それまで熱帯森林の中で暮らしていた祖先がサバンナに出たのですから、サバンナにいるライオンなどの本物の捕食者に狙われるようになりました。それを回避するには、よく見張っていなければなりません。そのためには見張る目の数が多い方がよいので、大勢の集団で暮らすようになりました。しかし、そうすると今度は、ヒトどうしの間での利害関係の対立が起きるなど、社会関係が複雑になります。そんなこんなが重なり、ヒトの祖先の生活は、それまでよりも苦労が多くなったでしょう。そして、前回までに書いたように、いろいろな理由で脳が大変に大きくなりました。

こんな大きな脳を持つ赤ん坊を育てるには、時間もかかるし、多大なエネルギー投資が必要となります。そこで、ヒトは、共同保育が必須となったのでした。哺乳類の生活を全体的に考慮すると、ヒトという動物は共同保育でなければ子育てができない動物になったのだということがよくわかります。

こんな長い進化の過程でヒトは共同保育になったのです。ここで、声を大にして主張したいのですが、多くの人々が子育てにかかわらねば子どもが育たないのは、ヒトという動物の本性なのだということです。この数十年の社会の変化のせいで、「働くお母さんのために保育所が必要」になったのではないのです。そもそも、ヒトという動物は、赤ん坊の世話にも、少し大きくなった子どもの世話と教育にも、親だけではなく、多くの人々がかかわって初めてそれが達成できるような生き物なのです。

本当は今でも、これまでもずっとそうなのですが、昨今の貨幣経済のもとでは、親だけでできないことはすべて、親がお金を払ってサービスを買うことによって成り立ってきました。学校も病院も、そして保育園や幼稚園もそうです。近代の貨幣経済の枠外の社会では、こんなことはありません。みんなが当然のこととして、何らかの形で子育てにかかわってきたのでした（図2）。その原則を忘れないようにしたいと思います。

図2　アフリカ、タンザニアの村で、上の子どもたちが下の赤ん坊を世話する（2010年、長谷川寿一撮影）

～(一財)全日私幼研究機構理事長からのご報告～

幼小の連続性を考える②

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構　安家 周一

■幼児教育と小学校教育の接続

前号では、幼稚園教育要領の改定の変遷や小学校入学のタイミングの世界比較から、日本の幼小接続を考える視点の整理をいたしました。幼児教育は前号で述べましたように、子ども一人一人の発達の方向が目標となっています。しかし、小学校以降の学校は教科書によってその学年に習得しなければならない達成目標が示され、理解が未達成であっても授業が進んでしまう可能性もあり得ます。教師の力量にもよりますが、未達成の復習は家庭に委ねられることも多く、共働き家庭などでは補習に手が回らない状況も推察されます。

幼小の接続を考えるときに、乳幼児保育と義務教育学校教職員の根本的な「児童観」の理解やすり合わせなくして、形だけの幼小の接続プログラムを編成することは難しいと感じています。都道府県、市町村教育委員会で幼児教育を理解している担当者は非常に少ないのが現状です。

■日本の学校制度

明治5年に発布した日本の学校制度ですが、全国共通の教科書などで、識字率が大幅に高くなったことなどの成果が上がりました。時代が進み、フィンランドなどの先進的な教育環境や世界の情勢を俯瞰し比較してみると、現在の日本の教育制度や内容に相当遅れを感じますし、義務教育学校の教師の疲弊も報じられます。それを特に感じるのは、大学生や新卒で入職してくる若年層の若者たちが、自分の周りで起こっている様々な出来事や政治などに対して、疑問を持ったり意見を交わしたりする能力が弱っているところです。すべてのことの正解はスマホにあるかの如くふるまう姿にも違和感があります。

■Society5.0これから人工知能AIの時代に向かいます

すべての事象を自分事として捉え、周りの人と協働しながら共存していく力が求められています。スティーブジョブスが我が子には電子機器を与えず、本を70冊用意したことは有名です。電子機器やデジタル機材に触れる時期を、できるだけ後にずらせることが肝要です。自分の体と頭をフル回転させ、様々な創意工夫を繰り返しながら遊び、人とディスカッションしながら折り合いをつけていくことのトレーニングが必要です。正解を覚えることではなく、なぜこの答えが導き出されるのかを常に考えられる思考回路です。200万年前にアフリカ大陸に発生し、その後他のホモ族が絶滅したのちも、私たちホモサピエンスが長きにわたって生き延び、地球上に生活できている最大の原因は、相手の痛みを感じることができる「三項表象機能」（長谷川眞理子（2023）『進化的人間考』）がキーワードと言われています。幼少期から生活や遊びの中で発生する様々なぶつかり合いや喧嘩、そして仲間との実生活で培われた社会性や協調性が、Society5.0に欠かせない基礎的能力です。この力は主に乳幼児期の遊びを中心にした10歳くらいまで活動でに培われるのです。

まなびの主体者である子どもが、乳幼児期から児童期にわたって意欲的に学び続けられる構造を整理するために、私たちは相当のエネルギーを費やさなければなりません。34.6万人（2024年発表）に上る登校出来ない・しない子どもたちが生じていると報道されました。もはや現在の学校制度が子どもにとって魅力的に感じられなくなっていることも一因なのかもしれません。幼小の接続の問題ではなく、1学級当たりの人数や、小学校以降の学習量や内容を抜本的に柔軟に創意工夫できる環境が求められています。子どものことを一番知っているのは現場の先生たちです。

ECEQ®コーディネーター養成講座Ⅳの開催報告

大阪会場（令和6年11月18日）

11月18日（月）、大阪私学会館へ主に西日本から16名の受講者が集まり、養成講座Ⅳが開催されました。

開会にあたり安達譲副理事長よりご挨拶をいただき、その後はECEQ®・評価チームの委員による研修が行われました。まず、今年度にECEQ®を実施した千葉幼稚園（青森県）、はまようちえん（兵庫県）の動画を視聴しながら、講座Ⅰ～Ⅲのおさらいをしました。STEP1～5の全体像および各STEPの要点をおさえ直したところで、午後はSTEP3でよく行われる「田の字法」のワークを受講者が実際にやってみる体験型学習を実施しました。

受講者は4名ずつの4グループに分かれ、コーディネーター役と実施園役になってロールプレイを行い、各グループにはスーパーバイザーとして委員が1名ずつ関わり、サポートや助言をしながら進行していきました。

実施園の立場を体験した受講者からは、「初めての実施園には戸惑う人がいるだろうし、コーディネーターを頼りにしたくなる気持ちがよくわかった」と、体験型学習ならではの気づきについて声があがりました。その一方で、「果たして、自分は頼られても大丈夫なコーディネーターになれるだろうか…」などという不安の声もあがりました。不安の声については、自らもコーディネーターとして数々の園でECEQ®を経験してきた安達譲副理事長より、「最初は誰でも初心者で、不安に感じることもあると思います。けれども、経験を積むにつれて必ずスキルが身についてくるので大丈夫です。目の前の『まだできない不安』よりも、これからの『出来るようになっていく楽しさや希望』に目を向けてもらえれば。」という助言がありました。

この他にも講座Ⅳの一日を通して、都道府県を越えた受講者同士のつながりが生まれたり、個別の具体的な質問について委員が受け答えをしたりなど、会場にいる全員が一緒に学び合いました。

ECEQ®とコーディネーターにご興味のある方は、各都道府県のECEQ®コーディネーターまたは地区のチーム委員へお声がけください。あなた自身とあなたの園の幼児教育の質向上に寄与するばかりでなく、あなたの地域の園にも貢献できるようになれますよ。

アイスブレイクで笑顔がこぼれる参加者

東京会場（令和6年12月16日）

12月16日（月）、東京アルカディア市ヶ谷において、東日本から23名の受講者が参加して養成講座Ⅳが開催されました。

講座の構成は大阪会場と同様に実施致しましたので、本稿では参加した受講者の事後アンケート結果（回答率100%）を主にお伝えして開催報告といたします。

Q1.本研修の理解度は？　十分理解できた[43%]　ある程度理解できた[57%]

主な理由）・講座Ⅰ～Ⅲのテキストや動画での学びを対面で確かめることができた。・共に学ぶ仲間と繋がれて良かった。・田の字ワークを実際に体験できてよくわかった。等

Q2.本研修での学びや気づきは？

・ファシリテーターの「非指示/非評価」の姿勢の大切さ。・コーディネーターの笑顔やアイスブレイク等による雰囲気づくり。・意見のグルーピングの難しさ。等

Q3.ECEQ®コーディネーターとして不安なことは？

・講師のように、自分が参加者に寄り添って本音を聞き出せるか自信がない。・意見をまとめて整理するのが難しい。等

Q4.ECEQ®コーディネーターとして今後やっていきたいことは？

・公開保育に参加したり、自園で実際にやってみたりして経験を積んでいきたい。・コミュニケーション能力を高めたい。等

Q5.ECEQ®コーディネーター養成講座を他の先生にも勧めたいか？

とてもそう思う[43%]　そう思う[43%]　どちらとも言えない[14%]

主な理由）・自園の保育の質向上に役立つ。・ECEQ®コーディネーターには責任と相応の負荷があり、手弁当では安易に勧められない。・「園同士が力を合わせてより良い保育を目指す」ECEQ®のポリシーには社会的意義があり、裾野を広げていく価値がある。等

以上のように、多くの前向きな回答がありました。特に、他の受講者と共にECEQ®の一部を実際に体験できたこと、講師や受講者の“熱”や“雰囲気”を肌で感じたことが異口同音に表され、全5回の養成講座唯一の対面講座を活かした有意義な機会となりました。ここで学んだ受講者がECEQ®コーディネーターとして、今後各地域で活躍されることを期待します。

ECEQ®・評価チームの各地区担当が講師を務めました

幼児教育の質向上とECEQ®～期待される役割と効果～④

8月号より4回にわたって、ECEQ®に参加された学識者や行政の方から、ECEQ®に参加した感想やECEQ®に期待される役割・効果を執筆いただきます。幼児教育の質向上が求められる現在、その実現のために改めて園やECEQ®に求められることを見つめ直すきっかけとなれば幸いです。

公開保育は何を公開するのか

北海道大学教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター
准教授／川田 学

学校における公開授業は、もともと日本で発展したともいえるほどのお家芸です。戦後の高度経済成長から1980年代あたりまで、日本社会は勤勉な労働力を大量に輩出したわけですが、諸外国の研究者や実践家はその“秘密”を日本流の教育に見出しました。その中で、教師たちが互いに授業を見合って学ぶ公開授業にも注目が集まり、模倣して取り入れる海外の現場も多くあったようです。公開授業は、「授業研究」の中核的な方法となったのです。

学校教育で授業研究が盛んになったのは、1950年代以降とされています。おそらくはその余波が、地域の幼稚園や保育所にも及んだのではないかと想像します。座学での研修ではなく、まさに目の前で展開する実践を題材にして学び合う公開保育は、単に研修というだけでなく、「保育研究」としての意味を持つといえるでしょう。ECEQ®では、実施園が自分たちならではの「問い」を生成し高めていくことを重視していますが、それはこのシステムが「保育研究」を志向していることの証左だと思います。

研究とは何でしょうか。研究は英語で”research”と書きます。「探す」を意味する”search”の前に、<re->がついたスペルです。<re->は再帰性の接頭辞ですから、自分がしていることを自覚するプロセスを含むという意味があります。研究とは、感覚的にやみくもに行う行為ではなく、振り返り省察し分析することを必要とするものです。研究は研究者だけが行うもの、数値などで示されるようなものというイメージがあるかもしれませんが、それは狭い研究理解です。また、研究とは客観的なもので、主観が入ってはいけないもの、というイメージも適切ではないのです。

ここで「主観」と「客観」の意味を確認しておきたいと思います。津守真さんは、「主」という漢字が王座の燭台（この字は、“王”の上に点がついたもので、点はろうそくの炎を意味する）を意味し、「客」という漢字が「足先が固い石に届いて、ひっかかるさま」であることから、「自分の見方が固定して動かないのが主観であり、外にあるものにひっかかってとどまって、物の輪郭をあちこちうつりゆくのが客観である」としています。私たちは、主観は曖昧なもので、客観は確実なものと思いがちです。しかし、実は、主観というのは問題を一面的にとらえることであり、客観というのは問題を多角的に、ウロウロと動き回りながらとらえようとすることなのです。

そう考えると、研究に個人の考えが入ってはいけないわけではなく、むしろ問題を様々な角度から照らし出すためには複数の個人の考えが交流されることこそ必要です。ECEQ®で公開保育が重視されることの意味は、コーディネーターを相談相手としながら生成された「問い」を公開するところにあるのではないでしょうか。公開された問いは、実施園にとってのものであると同時に、参加者にも開かれます。公開保育は、公開指導会ではなく、保育研究の一環として、共通の問いをめぐってコミュニケーションを行う場としての価値があります。その際、出発点となる問いは実施園が提示してくれますが、それに接した参加者が、またそれぞれに自己の、自園の問いを触発生成していく時に、公開保育＝保育研究の意義が高まります。

私自身は、まだわずかしかECEQ®に関わりがありません。ただ、私の知るECEQ®のプロセスを経た園の保育者が生き生きとしており、職員同士、管理職と職員、保育者と子どもなどの間での対話が活発に行われているという印象があります。園内研修に参加させていただくと、園長だけが話しているのではなく、現場の保育者からも声が良く出て、問いが含まれた内容が多いことに驚くことがあります。現場で保育研究が行われている集団というのは、じつに魅力的なものです。

～令和7年度ECEQ®実施申請受付期間です!～

ECEQ®実施申請受付期間は5月末までです。
ECEQ®を実施されたい園は各都道府県団体までお問い合わせください。
ECEQ®についてもっと知りたい方は右記QRコードよりECEQ®ホームページをご確認ください。

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

第16回ようちえん絵本大賞

～新しい絵本を見つけよう～

大賞15冊が決定

第16回ようちえん絵本大賞は、“子どもに読み聞かせたい絵本”、“お父さん・お母さんにお勧めしたい絵本”、“幼児教育に携わる者だからこそ発掘できるまだ多くには知られていない素晴らしい絵本”を選考の基準として、（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・広報委員会が過去おおむね8年以内に出版された絵本の中から選考を行いました。その結果、特別賞3作品を含む15冊が絵本大賞に選ばれました。

広報委員一同、これからも子どもたちと絵本との出会いの一助となるよう努めてまいります。なお、参考までに広報委員会が絵本の紹介文を記載させていただきました。

第16回ようちえん絵本大賞　受賞一覧

	絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
特別賞	（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理　事　長　賞 **ほんのなかのほんのなかのほん** ジュリアン・ベール（さく） シモン・バイイ（え） 木坂涼（やく） くもん出版	トムくんが楽しみにしていた海水浴なのに、パパたちは遊んでくれない。１人でお散歩していると、足元に本が１冊。その本を開いてみると、今度はトムくんのスキー旅行のお話が始まります。トムくんが楽しみにしていたスキー旅行なのに、パパたちは遊んでくれない。１人でお散歩していると、本が１冊、今度は宇宙旅行のお話が始まります。 本の中に実際に2冊の本が綴じこまれた絵本で、言葉は同じで、違う場所での物語が展開します。ちょっと不思議な体験です。
	広報委員長賞 **ぼくは川のように話す** ジョーダン・スコット（文） シドニー・スミス（絵） 原田勝（訳） 偕成社	吃音があり、どうしても言葉が出ない日がある主人公。そんな時、父親はいつも大きな川に連れていってくれます。大きな川は美しいけど、ごうごうとぶつかりながら流れていく様は、自然の中にも吃音があることを気づかせてくれます。流れるように話すことでなく、自分らしく話すことの大切さを目標とした主人公の成長の物語。瑞々しい絵が心に響きます。
	こどもがまんなかしんぶん賞 **おつきさまのりんご** 乾栄里子（作） 西村敏雄（絵） 文溪堂	夜に起きて活動するフーフーはいつもひとりぼっちで、話し相手はお月さまだけ。そのお月さまがだんだん痩せてくると、フーフーは心配して塔のてっぺんにりんごを置くのですが、そのりんごは実は他の人たちを幸せにしてくれていました。誰かを思うやさしい気持ちが起こすちいさな奇跡に、どこかほっこりと胸が温かくなるお話です。

絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
ネコヅメのよる 町田尚子（作・絵） 岩崎書店	ネコだけが知っているネコヅメのよる。街中のネコがこの夜を待っていた。あっちからもこっちからも猫が集合！それが夜空に現れた途端、ネコたちの目が真ん丸に光りました！夜空に現れたのは… 三毛猫、白猫、黒猫、キジサバ、いろいろな猫の表情もお楽しみに！
しま マルク・ヤンセン（作） 福音館書店	大荒れの海で大破した船に乗っていたのは、男と女の子と犬。猛威をふるう自然に飲み込まれて遭難した2人と1匹がたどり着いたのはカメの甲羅の上の不思議な「しま」。 美しくダイナミックに描かれた深みのある海のお話に、字は一切ありません。絵を読む絵本からダイレクトに心へ響いてくる臨場感を味わいながら、読み手自身がちょっと素敵に、それぞれの物語を紡いでいくことでしょう。
まよなかのゆうえんち ギデオン・ステラー（作） マリアキアラ・ディ・ジョルジョ（絵） ＢＬ出版	人間が帰った後の真夜中の遊園地に森の動物たちがしのびこんで、朝までたらふく遊んで、朝には森に帰っていくという単純なストーリーです。でも、ページをめくるごとに、まるで自分も一緒に遊園地で遊んでいるようなワクワク感があふれてきます。文字のない絵本、でも文字など必要がない絵本なのかもしれません。
かぜのうた フィリップ・ジョルダーノ（絵） さわべまちこ（文） ポリフォニープレス	「かぜがふいたら、○○○」が繰り返される絵本です。ふわりふわり、ぽわんぽわん、ざわわんざわわんなど、風が招く音を美しくダイナミックな絵で表しています。思わず耳を澄ませて、風を聞いてみたくなるかもしれません。シンプルな言葉は、年齢を問わず楽しめます。
くみたて 田中達也（作） 福音館書店	ミニチュア作家が身近なものをいろいろなものに見立てた絵本。洗濯ばさみは、みんなが大好きブランコに。歯ブラシはぐいとまげて街灯に。メガネはそうっと外してポチャンと飛び込むプールに。さて、セロテープの変身はなんでしょう？巻き寿司やホットドック、ケーキなどの食べ物が出てくるページでワクワクも最高潮。身近なものの大変身にきっと大歓声が上がるはず。
クジラがしんだら 江口絵理（文） かわさきしゅんいち（絵） 藤原義弘（監修） 童心社	深海は日の光が届かないので生き物が少なく、食べ物も少ない所ですが、ごくたまに突然はるか上の方から巨大な食べ物の塊が降ってきます。それが命を終えたクジラ。 クジラの体はそれから何十年にもわたって、深海に暮らす生物たちの命を支え続けるのです。これは海の底で命を繋ぐ「鯨骨生物群集（げいこつせいぶつぐんしゅう）」のロマンに満ちた壮大な物語です。
星をつるよる キム・サングン（絵・文） すんみ（翻訳） PIE International	眠れなくてひとりぼっちで不安な夜、窓の外のお月様に「あそぼうよ」と声をかけてみると、星形の釣り針がついた糸がするするとおりてきて、眠れないお友だちがつぎつぎとあつまってきました…。月のうさぎさんが優しく包んでくれるような気持ちにさせてくれます。夜空も癒されるような素敵な色で表現されています。
ベイビーレボリューション 浅井健一（文） 奈良美智（絵） クレヨンハウス	青い空の下、3万人のベイビーがハイハイで進んでいきます。やがて30万、300万、30億のベイビーの大行進になります。ついには戦争地帯に突入。さて、ベイビーたちを前に兵士たちは何を思うのでしょう、、、奈良美智が描くロックな赤ちゃんの姿は勇気と元気を与えてくれます。同時に平和を願わずにはいられません。

絵本名・作者・出版社名	絵本の紹介
109ひきのどうぶつかくれんぼ のはなはるか（作・絵） ひさかたチャイルド	よーいドンで109匹の動物たちが、「みどりのサボテンちたい」や「あおいろおはなばたけ」に一斉にはしりだして隠れました。さあ、かくれんぼの始まりです。 みんな見つからないように上手に隠れています。最後まで見つからなかった動物は銀杏の葉っぱに隠れた〇〇〇〇〇でした、親子で楽しみながら見つけてみましょう！
いやっ！といえないノニ ヘザー・ハート＝サスマン（文） ジュヌヴィエーヴ・コテ（絵） くまがいじゅんこ（訳） サイエンティスト社	ノニは色々なことができます。弟にミルクをあげられるし、友だちのスージー家にも一人で行けます。ＡＢＣをさかさまから言えるし、ママのお手伝いも出来ます。でも、ひとつだけできないことがあります。それは、どうしても「いやっ！」と言えないことです。「いやっ！」と言えないばかりに、とんでもない髪型なってしまいます。我慢の限界にきたノニがついに「いやっ！」と言いました。すると…。
まざっちゃおう！ いろいろな　いろの　おはなし アリー・チャン（作・絵） 小栗左多里（翻訳） フレーベル館	にぎやかな赤色、明るい黄色、すました青色。仲良く暮らしていた色たちが「自分の色が一番」と言い出し、別々に住むことになりました。そんなある時「まざっちゃおう！」と黄色と青色の間に生まれた緑色。色が混ざり、次々に新しい色が生まれるとまたみんなで一緒に住めるように町をつくりなおしました。違いを認め合い、受け入れるなかで新たな誕生や発見を描いた絵本で、配色や表情からも目が離せない一冊です。
みんなのいちにち たけうちちひろ（作） アリス館	立派な建物のそれぞれのお部屋では、みんなはどんなことをして過ごしているのかな？お仕事をしている人もいれば、寝ている人もいる。同じ時間なのにそれぞれのお部屋では色々なことが繰り広げられています。朝の６時から夜中まで時間ごとに描かれた絵本です。次は何をしている時間かな？ページをめくるのが楽しみになる、繊細でかわいい切り絵の絵本です。

令和7年度賛助会員（園児の保護者等）入会について

「まなびの広場」をお手に取っていただいております先生方には、当機構の諸事業に対しご理解ご協力を賜り感謝申し上げます。

当機構の賛助会員の御礼として配布しております「こどもがまんなかしんぶん」は、令和４年度より開始したデジタル配信をはじめ、現在、幼児教育の大切さをはじめとした掲載情報の充実化を図り、多くの方に反響をいただいております。

令和７年度の賛助会員入会申込書は、２月上旬以降順次各園に郵送いたしますので、ご確認いただけますようお願いいたします。

これからも子どもたちが幼稚園・認定こども園、ご家庭で過ごす時間がより豊かになりますよう事業をおこなってまいりますので、是非ご活用いただけますと幸いです。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

【こどもがまんなかしんぶんについて】
■会　　費：1口・年間250円
■入会特典：年10回（紙媒体6回、デジタル配信4回／８月と３月を休刊予定）

令和6年8月23日（金）・24日（土）に東京・大妻女子大学にて開催された幼児教育実践学会口頭発表、ポスター発表の概要を掲載します。12月号に引き続き本号では2園より、日々の現場で見えてきた課題、解決のための実践的な取り組み、今後の幼児教育を担うための振り返りをご報告いただきました。

第15回幼児教育実践学会口頭発表（学校法人ときわ幼稚園）

子どもとともにあゆむ保育 ～非認知能力の育成を通して～

香川県　学校法人ときわ幼稚園／港 麻里栄　津川 美絵
研究協力者：香川大学副学長／山神 眞一 先生

○はじめに

本園は讃岐平野に多く見られる、ため池や松林などの豊かな自然に囲まれ、季節の移り変わりを感じながらのびのびと過ごせる環境にあります。広い園庭を有しており、クラス活動以外の時間は、園庭で異年齢がともに体を動かして思いきり遊び、充実した時間を過ごしています。好奇心旺盛で、様々なことを知ろうとする意欲的な様子が見受けられます。また、すべての教職員が子どもとかかわる中で、情報共有がしやすい環境でもあります。

平成29年の幼稚園教育要領改訂に伴い、学びを進める中で、幼児教育において育みたい資質・能力の３つの柱と非認知能力との関係性の深さに着目しました。非認知能力で取り上げられる「目標に向かって頑張る力」「人とうまく関わる力」「感情のコントロール力」などの生きていくうえで重要な力を育むことは、これからの子どもたちの生活に良い影響を与えると考えました。これまでの自園の重点目標「がんばる子」「思いやりのある子」「あいさつのできる子」と重ねながら、保育をする私たちにも保護者にもわかりやすい「３C」の合言葉で、令和２年から研究を継続してきました。

3C
目標に向かって頑張る力
↳Challenge
人とうまく関わる力
↳Communication
感情のコントロール力
↳(Self) Control

○実践を通して

・「３つの力」を基本に考える

日々の生活で子どもたちの心が動く「良いな」と感じた出来事を付箋に書き、３つの力に整理しました。ここで、意外な友だちとのつながりの発見や、異年齢間の交流の濃さ等、他者とのかかわりの中での心の動きが特に大きいことがわかりました。

・カードの活用

子どもの実態、意見を反映した「がんばりカード」を作成、活用しました。項目は運動遊びや生活面、自分で決めたもの等、様々です。子どもたちの「年長さんみたいにできるようになりたい」「あれ、やってみたい」という思いを〝見える化〟しました。意欲をもって何かに取り組むには便利ですが、うまく機能するには、子どもの気持ちを適切なタイミングで〝そっとひと押し〟する、保育者のスキルが試される使い方の難しいツールでもあります。

・保育者の姿勢（我慢＆見極め力）

あれこれと手出し口出ししたくなる気持ちを抑え、適切な場面でそっと登場する、私たち保育者の在り方です。その日の遊びやできごとを明日に向けてより良くするためにどうするか。保育者発信ではなく子どもたちの心の動きから環境を作っていくには？等、幅広い年齢、保育経験年数の者が集まり、公開保育や事例のディスカッションなど、様々な形態で意見を出し合い、実践していくことを繰り返しました。

○研究より学んだこと

１番に感じたのは、保育をする我々の意識の変化でした。マニュアル通りではなく、子どもの実態に沿って遊びを考え、環境を作っていくようになりました。保育者からの「こんなことをしてみたい」が増え、より個性が際立つクラス、子どもたち、幼稚園になったと感じます。保育者が主体的に考えて動けるようになり、子どもを肯定的に見つめる視点も高まりました。

貴重な発表の機会をいただき、ありがとうございました。参加されている方々の意見をいただく中で、〝非認知能力〟の奥深さを再認識しました。引き続き子どもたちの心の動きに寄り添い、ともに生活を豊かにしていけるよう、研究を重ねていきたいです。

環境の再構成について

熊本県　荒尾第一幼稚園／宇梶 達也　増永 彩希　上野 汀紗　松川 夏海

子どもたちとの生活の中で、保育者は「今どのような環境が必要か」を考え、環境を構成します。子どもたちはその場に関わり、素材や遊具に操作を加えて、何かに気づいたり、思い描くモノなどを作ったり、場やモノをより良くしていく姿が見られます。この姿を「環境の再構成」と考えます。また、環境が当初のままで活動が深まらない場合、保育者が環境を再構成することで、子どもたちの興味関心を引き出すことができます。再構成とは、子どもにも保育者にも「気づき」や「より良くしていくこと」を生む行為です。再構成が正解かどうかはやってみなければわかりません。そのため、「やってみる」ことが可能な環境を整えることが大切だと感じます。

【3 歳児の環境との関わり】

雨樋に砂を敷き水を流す遊びでは、砂の乗せ方によって雨樋が傾く問題が起きました。子どもはスコップを使って砂を均一に敷き、傾く問題を解決しました。またエルボパーツを用いた水の流れの時間差に興味を持ち、中を覗き込んだり傾けるなどして、何かを得ようとする行動がみられました。

【4 歳児クラス　保育者と子どもの再構成】

4月の保育室環境を3歳児クラスからのつながりを考え「線路作り」が始まるであろう環境を用意しました。当初、画用紙を用意しましたが線路が作られることはありませんでした。保育者は素材をダンボールに変更し、広い机を確保するなど環境を再構成しました。その結果、子どもたちは線路を作り始めました。さらに図鑑などで、線路の構造に触れる環境を作りました。知識を得ることで創作意欲がさらに高まりました。保育者が、子どもたちの興味を把握するだけでは活動が深まらないと感じました。

・挑戦的課題の配置

机の配置について子どもたちに意見を聞き、「机と机の間を空けておく」という選択が新たな創作の可能性を生み出しました。机の間を鉄橋で繋ぐ遊びが始まりました。保育者が挑戦的な課題を含む環境を構成することで、子どもたちの創造性を刺激しました。

【5 歳児クラスの子どもたちによる再構成】

・9月のトランプ製作

他の子どもたちがトランプ遊びをしているので、トランプが足りないという状況から、子どもたちは「作ればいい」と考え、トランプ製作を始めました。自分たちで作ったトランプで遊ぶことで、格別の楽しさを味わっているようでした。

・2月のトランプ製作～本物志向へ

作ったトランプで何度も遊んでいると、どのカードが「ババ」ということがわかってしまい、ババ抜きがなりたたなくなりました。「本物らしさ」を追求して大きさを揃えたトランプ製作が始まりました。

・問題解決の工夫

製作する人数が増えたことでカードが重複する問題が生じましたが、「これから作るカードを伝える」「完成品を別の場所に置く」など、効率的な方法を考え、問題を解決していきました。

【まとめ】

試行錯誤を重ねながら「より良いもの」を目指す過程は、子どもたちにとって成長の場であり、学びの機会でもあります。また、試行錯誤の前の段階の「気づき」も、「再構成」につながると感じました。再構成は保育者にも、子どもたちにも、大切なことだと分かりました。

機構の活動報告・お知らせ

令和6年度全国教育研究担当者会議の開催

令和７年１月20日、アルカディア市ヶ谷私学会館において、全日私幼連と全日私幼研究機構の令和６年度全国教育研究担当者会議が開催されました。

本会議は、全日私幼連と全日私幼研究機構が連携を図りながら全国の私立幼稚園や私立幼稚園由来の認定こども園の支援を通じて幼児教育の振興や質向上に取り組んでいることから共同で開催され、全国の教育研究担当者、102名の方が参加し、講演・報告が行われました。

はじめに山西幸子全日私幼連副会長より開会のあいさつが行われた後、宮下友美恵全日私幼研究機構副理事長より趣旨説明が行われ講演・報告が以下の通り行われました。

〔講演①〕
「こどもがまんなかPROJECTについて」
尾上正史　全日私幼連会長

〔報告〕
「事前質問に対する回答／教育研究委員会からの報告」
岡本潤子　全日私幼連教育研究委員長
全日私幼研究機構教育研究委員長／研修チーム長
藪淳一　全日私幼研究機構 ECEQ®・評価チーム長
川原恒太郎　全日私幼研究機構ゆたかなまナビオンデマンドチーム長
野波雅紀　全日私幼研究機構ゆたかなまナビシステムチーム長

〔グループワーク①〕
地区ごとの情報共有

〔講演②〕
「『幼児教育における保育実践の質評価スケール案』の紹介と研修での活用」
掘越紀香氏　国立教育政策研究所

〔グループワーク②〕
質と評価について思うこと・考えること

〔講演③〕
「来るべき時代にどのような能力が必要になるのか考えてみましょう」
安家周一　全日私幼研究機構理事長

本会議では、グループワークも織り交ぜながら意見を交わすことができ、安達譲全日私幼研究機構副理事長の閉会のあいさつで終了しました。

第16回　＼対面で実践学会を実施します！／

幼児教育実践学会

対面研修で保育実践を語りあい、対話の中から学び、自身の保育を深めましょう。是非ご参加ください。

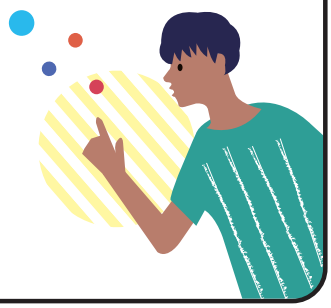
日時・会場
2025年 8/19(火) 20(水)
東京都　東京家政大学板橋キャンパス
〒173-8602　東京都板橋区加賀 1-18-1

定員 700人　参加費 8,000円

テーマ「一人ひとりの『こどもがまんなか』をまもる質の高い幼児教育を」
～ 社会全体でつむぎ未来へつなぐために ～

8月19日：基調講演・園内研修のメイキング
20日：口頭発表・ポスター発表

第１次案内について
（各都道府県事務局から各園へご案内いたします）
口頭発表・ポスター発表で各園の実践発表を大募集しています



実践発表の申込期間について
1. 口頭発表（20発表）：4月25日（金）17時まで
2. ポスター発表（先着40発表）
3. ポスター発表（研究者・大学教員等）（8発表）
］5月30日（金）17時まで
※研究者の発表形態は、ポスター発表のみとなります。

第２次案内について
5月中旬以降「参加申込」のご案内をいたします。

●編集責任者：高尾恵子　●発行者：一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
●〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25 私学会館別館4階　TEL 03-6272-9232　FAX 03-6272-8363